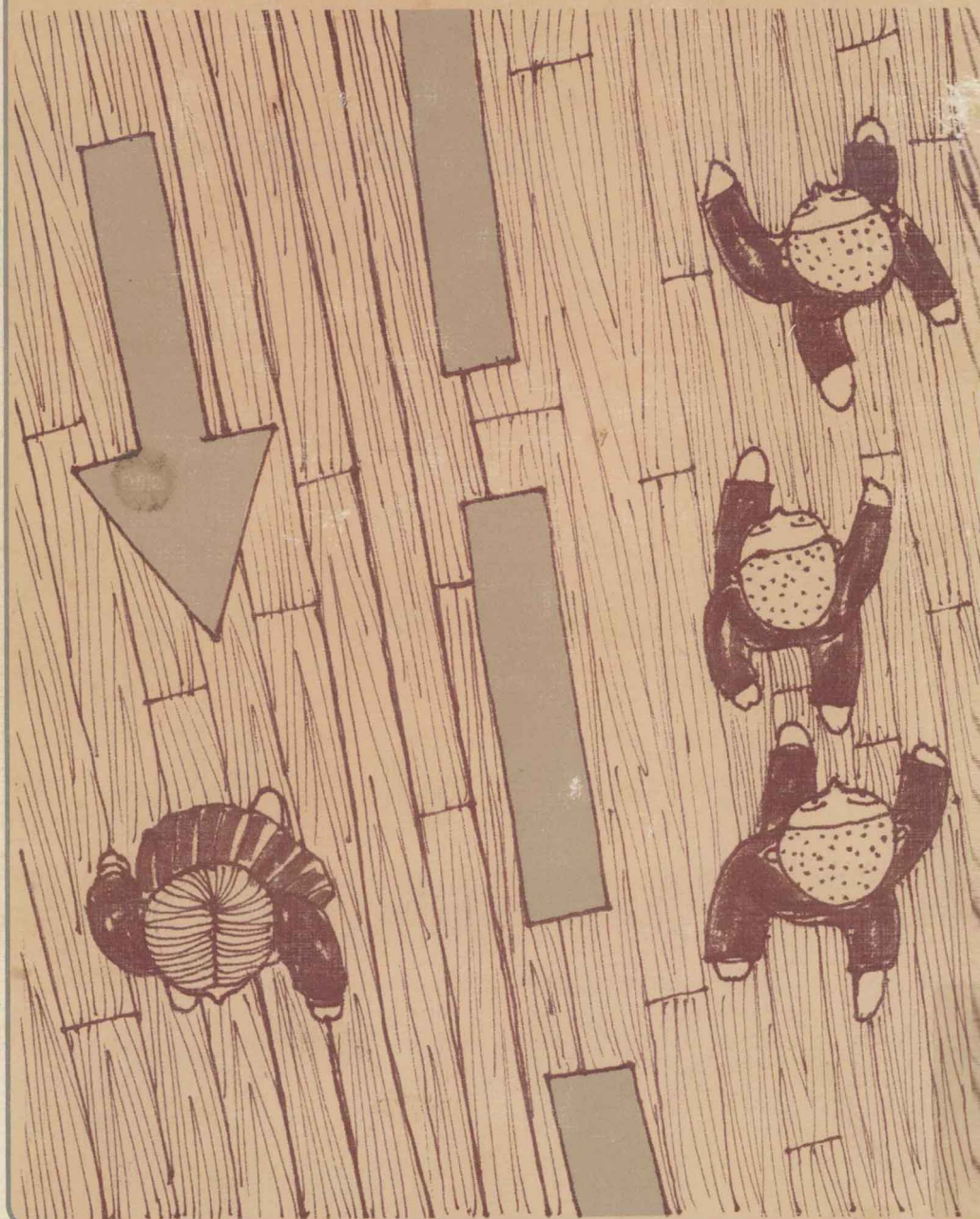


安全地帯

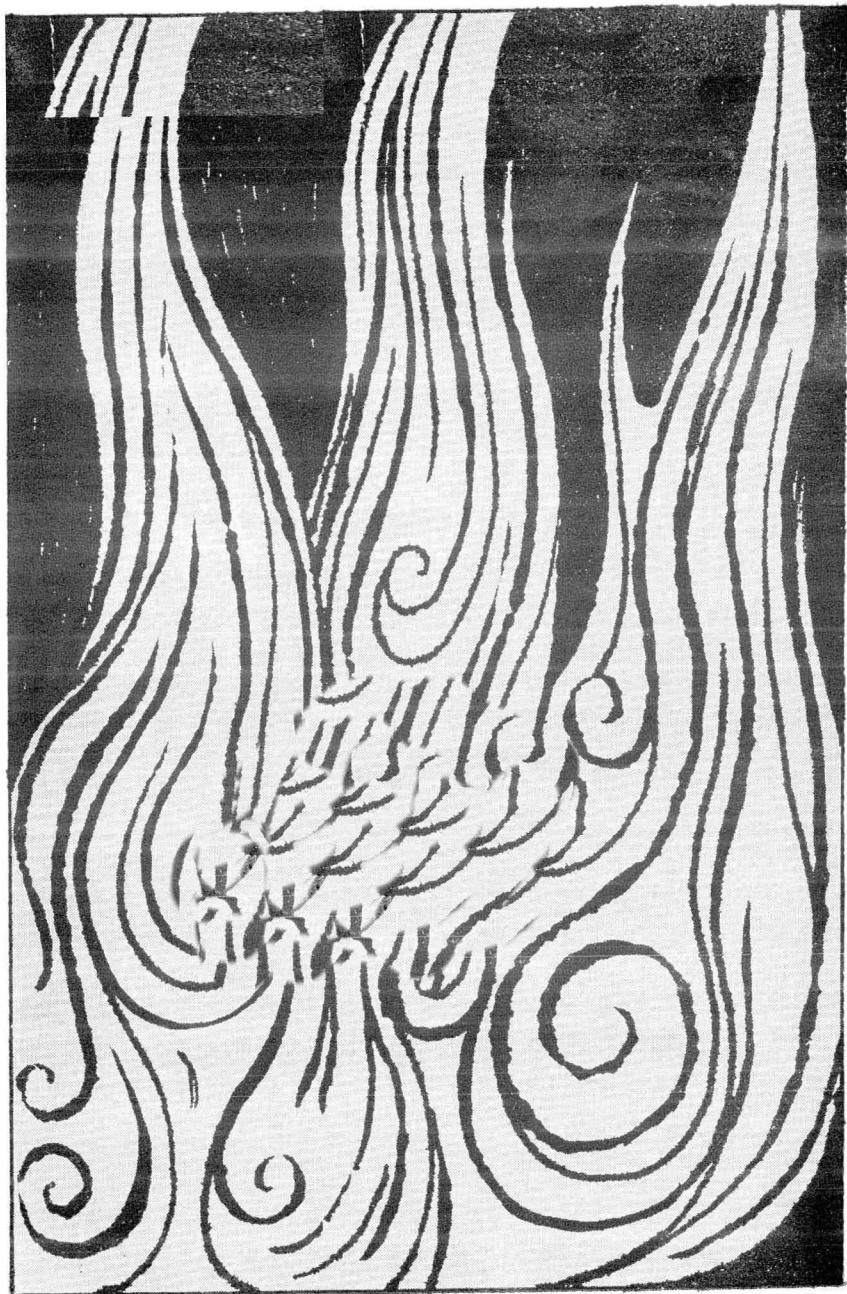
きちせん 池田鮮一 作 理論社刊



安全地帯

菊池 鮮二 作

理論社刊

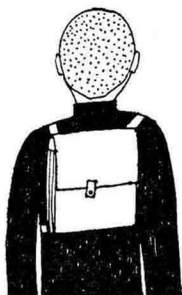


作者紹介

1925年、朝鮮に生れる。中学、小学校教師を
歴任し現在宮城県若柳町立畑岡小学校教頭。

著書に『垢』（理論社）などがある。

住所 宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字荒神堂115-2



作者 菊池 鮮 (きくち・せん)

NDC913 A 5 変型 20cm 348p

画家 篠原勝之 (しのはら・かつゆき)

1981年初版 8393-31519-8924

安全地帯 1981年 8 月第六刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町 104 番地 電話03 (203) 5791 振替口座 東京9-95736

安全地帯

——あらゆるところに中央線が引かれ、標識が明示され、少年たちは、その地帯の右側を音もたてずに歩く……

もくじ

1 破られた成績一覧表

5

2 学年PTAでの意見

32

3 分かるように教えて

47

4 アブラゼミが鳴いて

61

5 おとなになる悲しみ

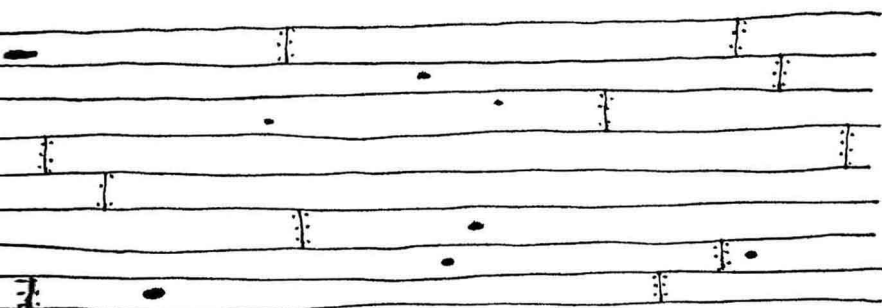
83

6 こころ波立つ季節に

115

7 生徒会役員改選の秋

144



8 向かい風にペタルを

195

9 長い雨の季節に詩を

209

10 加護坊山は日本晴れ

231

11 土間垣先生盗難事件

249

12 冷たい風と星の季節

263

13 ひとりぼっちの吹雪

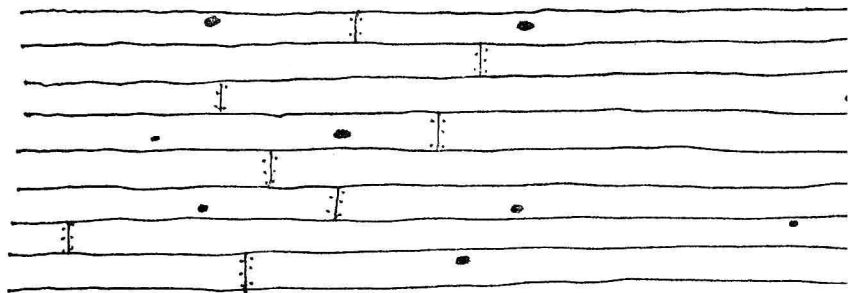
292

14 雪がなだれ落ちると

334

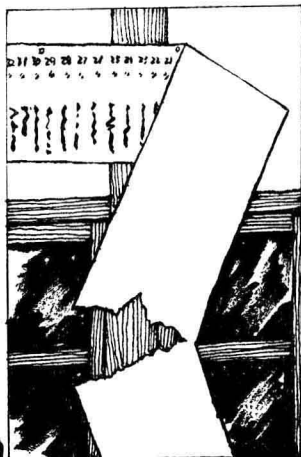
■
あとがき

346



そうてい・さしえ

篠原勝之しのはらかつゆき



1

破られた成績一覧表

1

清水信吉は中学二年。彼の家は町の南端にある。中学校に行くには、国道四号線を三百メートルほど北に進んで町並にはいり、さらに二百メートル進んで右に曲がると、あとは学校に通ずるひろびろとした道に出る。しかし、この国道四号線がたいへんである。

青あおと伸びはじめた麦畑を眺めながら、うっかり考えごとにふけていたりすると、耳もとでいきなりクラクションが鳴り、運転手までが顔を突きだしてどなることがある。

「なにボヤッとしてるんだ。こらっ、自転車！」

自動車を思いっきりケトバシてやりたいのだが、轟音^{ごうおん}すさまじく通っていくのがダンプでは、こちらの命が危ない。がまんして、よけてやるより仕方がない。みんなは、国道四号線を死号線と呼んでいる。

町並から校門の見える横道に入ると、だれもかれもがほっとする。両側には、萌え出たばかりの桜並木がつづいている。大木になった桜は空をおおい、緑の光をやわらかく舗道に投げかけてくる。

一年生は樹間を縫うように駆けたり、幹にびったり体をかくしてはとつぜん現れて、人をおどろかしたりする。先生たちの自動車も、ここばかりはのろのろ運転で、ふざけまわる生徒たちを、窓を開けて眺めながら通る。大声でわめき合っている一団もある。

信吉は決まった時刻に、ここにこられるようにしている。それはサブ(千種三郎)や忠則(佐木忠則)に、ここで会えるようにするためである。

信吉はジグザグ自転車を走らせ、女生徒を「キャッ」と叫ばせて、ふたりの間に車の鼻面を突っこんでから降りる。忠則は、「おっす」と高校生のようなあいさつをして、具合よくまん中に入れてくれる。そして、ともだちのうわさや、先生たちの陰口などを、存分にするのである。いわばこの桜並木通りは、信吉たちの自由な楽しい道なのである。

ところが、その日はちがっていた。国道死号線から校門の見える道に曲がって、信吉は思わず立ちどまった。桜並木は昨日のままなのに、まるで違っている。肩を組み、楽しげに歩いている姿はなかった。だれもかれもがゼンマイじかけの人形みたいで、右側を一列になって歩いている。道路までが冷たくすましている。——その原因は、すぐに分かった。昨日までなかった白線が、くつきりと道路のまん中をつつ走っている。そして、校門のあたりで、交通指導をしている週番の姿が見えたのである。

——おれたちの道路までとりあげるつもりか。よくもみんなはおとなしくしているな……。

信吉は腹がたった。自転車から降りて、しばらく突っ立って眺めていた。だれかが肩をたたいた。ふり向くひまもなく山本文男が、「おはようございます」と、ていねいなあいさつをし、とった帽子をキ

チンとかぶり、するりつと通って行った。

——全くおもしろくないやつに、今朝は会ったもんだ。だが、あいつは同級生でも、組がちがうから仕方ないや、同じクラスだったら、「なにすましてけっかる」と、どなつてやるところだ。それに、悪いことには、信吉は今朝、母と口げんかをしてきた。

「いつまで寝てんの……百姓は早く起きねば、いちにんに前になられね。おら家では、男はおまえだけなんだがらな」

「おら、百姓になんかなんね」

「そしたら、この家どうすんだ」

「知らねっちゃ、そしてなごど……」

信吉は、家業をつがなければならぬとは思っている。けれど母親の言い方が気になる。なんで早起きしねば百姓になれないんだ、と反発したくなる。そして、死んだのんべえ親父を思うと、すなおにそうは言えないのだ。三町歩の田圃^{たんぼ}なんか、たたき売ればいいじゃねえか、と、皮肉も言いたくなる。ふたりの妹は、黙ってうつ向いていた。そんなわけで、今朝はことさらに信吉はきげんが悪かった。

信吉は腹をたてた。白線をにらんで自転車を引きずって歩きだした。まっ白な中央線を車輪が何度も引き切るように、S字形にくにやくにや進んだ。うす黒い車輪の跡が白線にくっきりとつく……。

こうでもしなければ、信吉の気持はおさまらない。うつ向いて熱心に作業をつづけていくと、妙な情熱が湧^わいてくる。いつのまにか校門の近くまで来ていた。そこにだれかの脚がによっきり突っ立っている、進めない。顔をあげると、週番の腕章をつけた三年生が、腕組みして見下^{くだ}している。

「おい。表通りだったら、とっくにあの世行きだぜ……。その白い線が見えんのか」

「……………」

——白い線が見えなかったら、だれが苦勞してS字形行進なんかするもんかい。

「またぐために、引いたんじゃねえぞ」

「……………」

——またぐとはなんだ。S字形行進といえ……。そう思っても、信吉は声にはならない。

「お、だつて、歩くんでねえの、表は国道四号線なんだから……」

だれが死号線でS字形行進するかい。そう言いたかったが、上級生が五人も六人もいるんじや、声をだすわけにもいかない。仕方がない。信吉は口を尖らし、黙って右側に自転車^{ぶつか}を、ぐいと押してよけた。

「あぶねえでねえの……」

沼田校長がぶつかりそうになって、とびのいた。校長先生が信吉の顔を見て、ほおえんだ。さすがは校長先生だ。おれの氣持をさっしてくる。そう思ったとたん、校長先生がどなった。

「なん年生だ」

「二年二組です」

「お、だつ、いじゃねえ」

「はい」

信吉は、この春赴任^{ふじん}して来た沼田校長先生に、多少好意を持っていた。彼は赴任のあいさつのとき、こう言ったのだ。

「……みなさんは一点二点の点数なんか、たいしたことないと思うでしょう。点数点数って、点数にこだわるやつは、なさけないやつと思っている人もいるだろう……。第一テン、トリムスって、ばかにされ

るからな。すかすだ、わたしはそうは思わない。そう思っていないのだ」

ここから、さらに声を高めて言った。

「テントリム、スケッコー。おおいに点採り虫になってください。わたしはテントリム、スですと、胸を張って言うおうじやありませんか。いいですか。一点の差が人生の方向を大きく変えることだってあるんです。入りたい高校に、一点のために、入れないことだってあるのです。いまが人生で一番大事な時かも知れない。歯をくいしばって、半点でもよけいとることです。点数にこだわらないふりしているやつは、自分の点数を、真正面から見ると勇氣にかけている人かも知れません。そういう人こそ、弱い人間じゃあねえですか。みなさん、今の時代は競争の時代です。弱い者はどんどんおきざりにされます。だれも振り向いてくれません……。わたしは来た以上は、必ず他の中学校に負けない学校に見せます……。みなさんもそのつもりで、がんばってください。いいですね」

あのときは、おれも感激したな。校長先生が壇を降りても、しばらくの間静かだったから……。信吉は我に返った。帽子をとって忘れていたことばを言った。

「おはようございます」

不意をつかれて、きょとんとしていた校長先生の四角な顔が、急に崩れた。

「おはよう……。これからおだすなよ。この野郎」

そう言って、頭をなでくれた。しかし、そのとき不意に忠則の言ったことばを、思いだした。

「お、お、おれはな、なんぼ信が、そ、そ、尊敬するたって、お、お、おれは、すかねぞ。ぬ、ぬまた校長は……すかね」

宝部中学校の玄関は、校門から左に校庭を見ながら、真正面にある。玄関の右側は築山になっていて、岩をおいた植込みがある。その下に岩とコンクリートで固めた池があり、大事な来校者があると、小さな島から水が噴きだす。金魚、鯉、フナ、だれが投げこんだか、ナマズも、ドジョウも泳いでいる。池の手前には、先生方の駐車場があり、ここにも、白線がくっきりと描かれている。舗装された通路にはすでに水が打っており、チリ一つない。信吉たちの昇降口は、玄関から軒伝いの通路を通って、校舎の東端にある。信吉は廊下を見て、「ああ」と思った。そこにも白線が引かれてあった。道路が校舎に入りこんできたのだ。

二年二組の教室は二階である。廊下を歩きながら、どうもふだんと違うな、と思った。どこの教室の入口にも、花が飾られている。

(――そうだった。明日はPTAの授業参観日だ。それに、今日は中間テストの成績が、廊下に貼りだされるはずだ)

成績一覧表は二年一組の廊下に貼りだされていた。いつもなら、人が二、三人いるだけで、信吉も、横目で眺めながら通り過ぎていくのだが、その日はちがっていた。黒山のような人ばかりである。窓にはい上がってのぞいている者もいる。それでも信吉は後でゆっくり見ればいい、そう思って、そこを通り抜けようとした。すると興奮したささやき声が聞こえてきた。

「だれがやったんだ」

「やっぱり成績の悪いやつさ」

「まさか、おなごじゃないだろうな」

「思いきって、やったもんだね」

「いいきみだよ。貼りださなきゃ破られないのにな」

「あたり前じゃないか。なかったら破れないさ」

「ねえ……成績のいい人は、しないよね」

「こんなことすんの、非行少年のはじまりでがすべっちゃ」

「どうせやるなら、ぜんぶひっぺがせばいいのにな、中途半端な野郎だ」

「バリーッとやったら、スカーッとするぜ」

「お前やったのか」

「まさか、おれやるわけねえだろう……百番以内には入りっこねえんだ。おれは関係なしさ」

チビの進一（佐藤進一）が背のびして、覗きこもうとしているのを、信吉は見つけた。

「どうしたんだ」

「ぶっざいだ、やつがいるらしいんだ。ちょっと待ってる。うまいことすっから、おれの後ろさ、ついでこいな」——進一はそう言って、信吉をふり返り、大きな声をだした。

「ちょっと、ちょっと。ごめんよ、ごめんよ。ちょっととごめん、ごめんよ。ちょっと、ちょっと、ちょっと。ごめんよ」

いかにも用事ありげに、体をまるめて、脚と脚の間をかき分けるようにして、もぐりこんで行く。チビの進一は、そういう点では天才的だ。

「おい、信、ついてこいよ」

進一の腰にすがりついて、信吉も進んだ。

みんなの前に出て、腰をのぼすと、ふたりは同時に、「あっ」と声をあげた。

横に貼りだされた成績一覧表の最初のほうが、思いっきり引き裂かれ、紙がだらりと下がっている。

信吉と進一はそれをていねいに、押しひろげて見た。

一番から百番まで、マジックで名前が書きだされている。ひとりひとりの得点までが、ていねいに書き加えられている。そして、いたるところに泥がなすりつけられている。信吉はおおいそぎで順位を見た。いつも一番になっている山本文男が四番に下がっている。なぜか、ほっとした。一番から三番までは女性が占めていた。

（——それにしても、だれだろう……。おれのところさも、泥をつけたやつは……）

信吉はなんとなくばつが悪くなり、そっと抜けたそうとした。そのとき、だれかが背後から腕をのばして、破けた一覧表を画鋏でとめた。

「お、お、おめえ……。さ、さがったじゃねえか……。お、お、おれも、ろ、ろ、六十三番だとよ」
どもりの忠則だ。信吉は返事もせず人垣から抜けだした。すると、それを一組のかつ子（三品かつ子）がすばやく見つけて、小声で言った。

「信かも知れない……。自分でしておいてさ、また見さ來たんでねえの……。きっとそうだよ。そうに決まってるわ」

自分の勝手な想像に刺激されて、つづけて、妙子（根元妙子）にささやいた。

「……だから、こそこそ帰ったじゃない。いつもだったら、文男君と、トップ争いなのにさ……。きつと、信だと思っわ」

い。すると、チビの進一がとびだして、大声をあげた。

「おい、よく見ろ……。よく見ろよ。おれの名前だって、ちゃんとおるんだから、見えるだろう……。五番、八番、二十番と……。もっと、もっと後のほうだな……」

最初のほうから、最後のほうへと指さしていった。まさか、進一の名前が出るはずがない。疑いながらも、みんなの目がついていく……。

「残念でした。百番目のつぎでした。まだまだみんなの見世物になるおれさまではねえぞ」

「し、し、進一、お、お前、い、い、いつでも、百一番じゃねえか」

忠則が笑った。みんなも笑った。でも、それはばくはつするような笑いではなかった。どこことなくさびしい笑いだった。

チャイムが鳴ると、固まっていた人びとは、さっと動きだした。全員で朝の掃除そうじをやらなければならない。それでも後からやってきた女の子四、五人と、進一たちが残った。そこへ柔道着を肩にしたマー坊（遠藤正男）がやってきた。

「おれは……。へっ、四十五番か。ずいぶん下がりがったな。……まあいいさ。信のやつも下がったなあ……」

「なにぶつぶつ言ってるんだ。さ、早く、そことめてくれよ」

進一に言われて、ノッポのマー坊は腕をのばして高いところをとめた。そしてみんなで、しわになったところをていねいにのばし、貼りなおした。

一組や三組の連中は振り向きもせずに、朝掃除そうじを始めている。なのに、進一とマー坊、それに忠則は、たのまれもしないのに、一覧表の貼りなおしをやっている。こういうことをするのは、どういうわけか、